

ネット上の友人数と対人不安・孤独感 - 主観的な身体的魅力の高群と低群における因果関係 -

安藤玲子・坂元章

(お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科)

Key Words: ネットを介した対人関係、対人不安、孤独感、身体的魅力、パネル研究

問 題

一般に容姿の整った人は、他者により好印象を与え、高い評価を得やすいなど、メリットを受けることが多い(Berscheid & Walster, 1974)。このように身体的魅力が重視される社会では、逆に、身体的コンプレックスが高いと、相手の目を気にして消極的になったり、相手に好印象を与えようと動機づけられた場合には、対人不安が生じることもある(Leary, 1983)。また、対人不安から孤独感が高まる可能性もある(Leary, 1983)。しかし、テキストベースでのやり取りが主流のインターネット(以後、ネット)では、もともと視覚情報が少なく、身体的コンプレックスの高い人の視覚的ストレスを軽減すると考えられる。更に、ネットでは興味や関心の合う相手を見つけやすく、新たな関係形成がなされやすい。

このように、人の目を気にせずに新たな関係が容易に構築できるネット環境は、身体的コンプレックスの低い人よりも、高い人により恩恵を与え、彼らの対人不安や孤独感を軽減させる効果が予測できる。

そこで、本研究では、主観的な身体的魅力の高群と低群に対して、共分散構造分析の多母集団比較モデルを適用し、それぞれについて、ネットを介して得られた友人や親友などの関係数と、対人不安や孤独感との因果関係を検討した。なお、孤独感に関しては、家族関係と友人関係に分けて検討した。

方 法

調査対象 関東および関西の4年生大学の大学生178名(男性63名、女性115名)であった。平均年齢は男性が20.7歳、女性が20.1歳であった。

手続き 調査実施時期は、平成12年10月に1回目調査、平成13年1月に2回目調査を実施した。

調査項目

1. ネット上の友人数：ネットを介して知合ったなかで、同性の友人・親友数、異性の友人・親友数、恋人数の実数を尋ねた。分析はその合計数を用いた。
2. 身体的魅力への主観的評価：身体的魅力に関しては Marsh et al.(1994)の身体自己記述調査票(PSDQ)を参考に10項目を作成し、7件法で用い

た。 α 係数は1、2回共に.93であった。

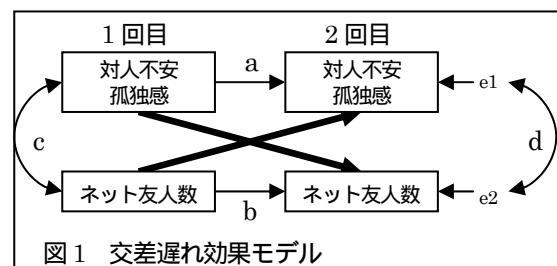
3. 対人不安：Fenigsteinら(1975)の5項目を7件法で用いた。 α 係数は.82と.86であった。

4. 孤独感：家族と友人関係における孤独感を広沢ら(1984)の孤独感尺度から各10項目を採用し、7件法で用いた。 α 係数は、家族関係孤独感が.86と.88、友人関係孤独感.88と.88であった。

5. 人口統計学的データ：年齢、性別

結 果

分析モデル 本研究では、ネット上の友人数と対人不安・孤独感に関して2時点で測定するパネル調査を行い、初回測定時の2変数の値が、追跡調査時の両変数の変化に影響を及ぼすかについて共分散構造分析を行った。分析には、このような縦断的データから、変数間の因果関係を推定するのに適しているとされる交差遅れ効果モデル(cross-lagged effect model)(図1)(Finkel, 1995)を採用し、初回調査時の身体的魅力得点の平均値で分割した高群(83名、低群：94名)に関して多母集団比較を行った。



なお、分析モデルの適合度の検討には、 χ^2 値、GFI(Goodness of Fit Index)、AGFI(Adjusted Goodness Fit Index)、RMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)、AIC(赤池情報量基準)を用いた。慣例的には、GFIの値が.9以上、RMSEAの値が.05以下、AICは最も低いときに、モデルが与えられたデータに非常に良く適合していると判断される。

各変数の平均値と標準偏差 基礎データとして、1回目調査時の身体的魅力高低群における各変数の平均値と標準偏差を表1に示す。対人不安、友人関係への孤独感に関して身体的魅力低群の得点が有意に高かった($p<0.001$)が、それ以外の変数に関しては、有意

差は見られなかった。

表1. 各変数の平均値と標準偏差

	身体的魅力高群		身体的魅力低群	
	m	SD	m	SD
ネット友人数	4.00	7.3	2.82	4.2
対人不安	21.5	6.4	24.7	6.3
孤独感(友人)	26.5	9.0	31.9	12.0
孤独感(家族)	26.3	10.7	29.2	10.2

ネット友人数と対人不安・孤独感との因果関係 身体的魅力高低群に関して、ネット友人数と対人不安・孤独感の因果関係(図1の太矢印部分)についてそれぞれ検討した。多母集団比較を行うために、図1のa~dの4本のパスに対して、これらのパスが身体的魅力高低群で全て異なると仮定したモデル1から、全て両群で等しいという制約をかけたモデル7まで、等価制約を徐々に加えていった(表2)。

表2 各モデルの適合度指標

モデル	等価制約	χ^2	DF	P	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
対人不安	モデル1 なし	0.00	0		1.000			40.0
	モデル2 a	3.12	1	0.08	0.991	0.825	0.110	41.1
	モデル3 b	0.48	1	0.49	0.999	0.972	0.000	38.5
	モデル4 a,b	3.64	2	0.16	0.990	0.898	0.068	39.6
	モデル5 a,b,c	3.64	3	0.30	0.990	0.932	0.035	37.6
	モデル6 a,b,d	11.94	3	0.01	0.970	0.799	0.130	45.9
	モデル7 a,b,c,d	11.94	4	0.02	0.970	0.849	0.107	45.9
孤独感友人	モデル1 なし	0.00	0		1.000			40.0
	モデル2 a	6.67	1	0.01	0.982	0.634	0.180	44.7
	モデル3 b	3.77	1	0.05	0.989	0.789	0.126	41.8
	モデル4 a,b	10.13	2	0.01	0.972	0.724	0.152	46.1
	モデル5 a,b,c	10.57	3	0.01	0.971	0.809	0.120	44.6
	モデル6 a,b,d	10.14	3	0.02	0.972	0.816	0.117	44.1
	モデル7 a,b,c,d	10.59	4	0.03	0.971	0.856	0.097	42.6
孤独感家族	モデル1 なし	0.00	0		1.000			40.0
	モデル2 a	0.682	1	0.41	0.998	0.961	0.000	38.7
	モデル3 b	0.281	1	0.60	0.999	0.984	0.000	38.3
	モデル4 a,b	0.957	2	0.62	0.997	0.973	0.000	37.0
	モデル5 a,b,c	4.008	3	0.26	0.989	0.926	0.044	38.0
	モデル6 a,b,d	1.187	3	0.76	0.997	0.977	0.000	35.2
	モデル7 a,b,c,d	4.238	4	0.38	0.988	0.941	0.018	36.2

その後、適合度指標を参考に、モデル5をネット友人数⇨対人不安の、モデル3をネット友人数⇨友人関係孤独感の、モデル7をネット友人数⇨家族関係孤独感の最終モデルとして採用した。各適合指標から、対人不安と家族関係孤独感のモデルは非常に適合度の高いモデルと、友人関係孤独感のモデルは許容される範囲にあると判断された。

結果は、主観的な身体的魅力が低い群では、ネット友人数の増加によって、対人不安と友人関係の孤独感が減少することが示されたが($p < 0.001$)、家族関係の孤独感への影響は示されなかった。また、逆方向の因果関係については、家族関係の孤独感に関してのみ、それが高まるとネット友人数が増加することが示された($p < 0.05$)。一方、主観的な身体的魅力が高い群で

はネット友人数からの因果関係はどの変数へも示されなかった。しかし、逆方向の因果関係では、友人関係の孤独感が増加するとネット友人数が減少する($p < 0.01$)、家族関係の孤独感が高まるとネット友人数が増加する($p < 0.05$)ことが示された(表3)

表3. ネット上の友人数と対人不安・孤独感との因果関係

	身体的魅力高群	身体的魅力低群
ネット友人数 → 対人不安	<i>n.s.</i>	-0.35***
対人不安 → ネット友人数	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
ネット友人数 → 孤独感(友人)	<i>n.s.</i>	-0.25***
孤独感(友人) → ネット友人数	-0.24**	<i>n.s.</i>
ネット友人数 → 孤独感(家族)	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
孤独感(家族) → ネット友人数	0.21*	0.21*

注 数値は標準化係数である。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

考 察

ネット上の友人数が心理的健康に及ぼす影響については、従来、その増加が人生満足度や社会的効力感を高めることが示されていたが(安藤, 2000)、今回の結果は、身体的魅力の主観的評価が低い人へのみ、友人数の増加が、対人不安や友人関係の孤独感を軽減させ、心理的健康を高める効果があることを示唆したものである。

いくつかの事例が示すように、身体的魅力の自己評価の低い人にとって、視覚的手がかりの少ないネット上で構築される対人関係はより重要で、恩恵を得られるものなのであろう。身体的魅力高群でこのような効果が見られなかったのは、おそらくこの群ではネット外での交友関係が頻繁なため、ネット上の交友関係から受ける影響が少なかったのではないだろうか。

なお、今回の研究では、逆の因果関係について、孤独感の種類によってネット上の友人を希求する行動が異なることが示された。その意味について、今後の検討が望まれる。

今後は、対象者数を増加させることや、ネット友人の性別によって異なるプロセスが生じるのかについての分析、また、関係構築に使われるネットツールごとの分析などが必要であらう。

引用文献

- 安藤玲子 2000 インターネット社会とこころの健康 島井哲志・坂元章 (企画) 日本心理学会第64回大会(京都大学)発表論文集 S48.
- Berscheid, E. & Walster, E. 1974 Physical attractiveness In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol 7. New York: Academic Press. Pp. 158-216.
- Finkel, S. E. 1995 *Causal analysis with panel data*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Leary, M. R. 1983 *Understanding social anxiety*. Beverly Hills, CA: Sage (生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房)
- Marsh, H. W., Richards, G. E., Johnson, S., Roche, & L., Tremayne, P. 1994 Physical self-description questionnaire: Psychometric properties and a multitrait-multimethod analysis of relations to existing instruments. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 16, 270-305.